

消えゆくものを残し
ふるさとを守り育てる

花の里地域活動

四国山岳植物園

岳人の森

GAKUJIN NO MORI

主人 山田 勲・山田 充

神山町とは

徳島県のほぼ中央、四季の変化に富んだ鮎喰川の上流に位置する町

■NPO法人グリーンバレー

「創造的過疎」による持続可能な地域づくり

■「神山アーティスト・イン・レジデンス」

国内外の芸術家を神山町に招く国際的なアート・プロジェクト

■「サテライトオフィス」

近年、ITの町として多くの企業がオフィスを設立

■「神山まるごと高専」

令和5年、私立高等専門学校 開校

など

岳人の森

神山町の西部、上分地区
標高約1000mの山間の
隣町・那賀町との町境に
位置する。



特産品 

すだち (すだち発祥の地)

人口

4764人
(令和6年2月1日現在)

画像出典:神山町HP



「岳人の森」造りとは

1970年代、若者が都会へ流出する中、山村後継者としての道を選んだ、山田 勲



中学3年生の勲(1965年)

1949年(昭和24年)生まれ
徳島県名西郡神山町上分字中津
農林業を営む両親
三兄弟の長男

「このままだと将来の山村は必ず衰退してゆく。
たとえ農林業が好調であってもそれは変わらない。」

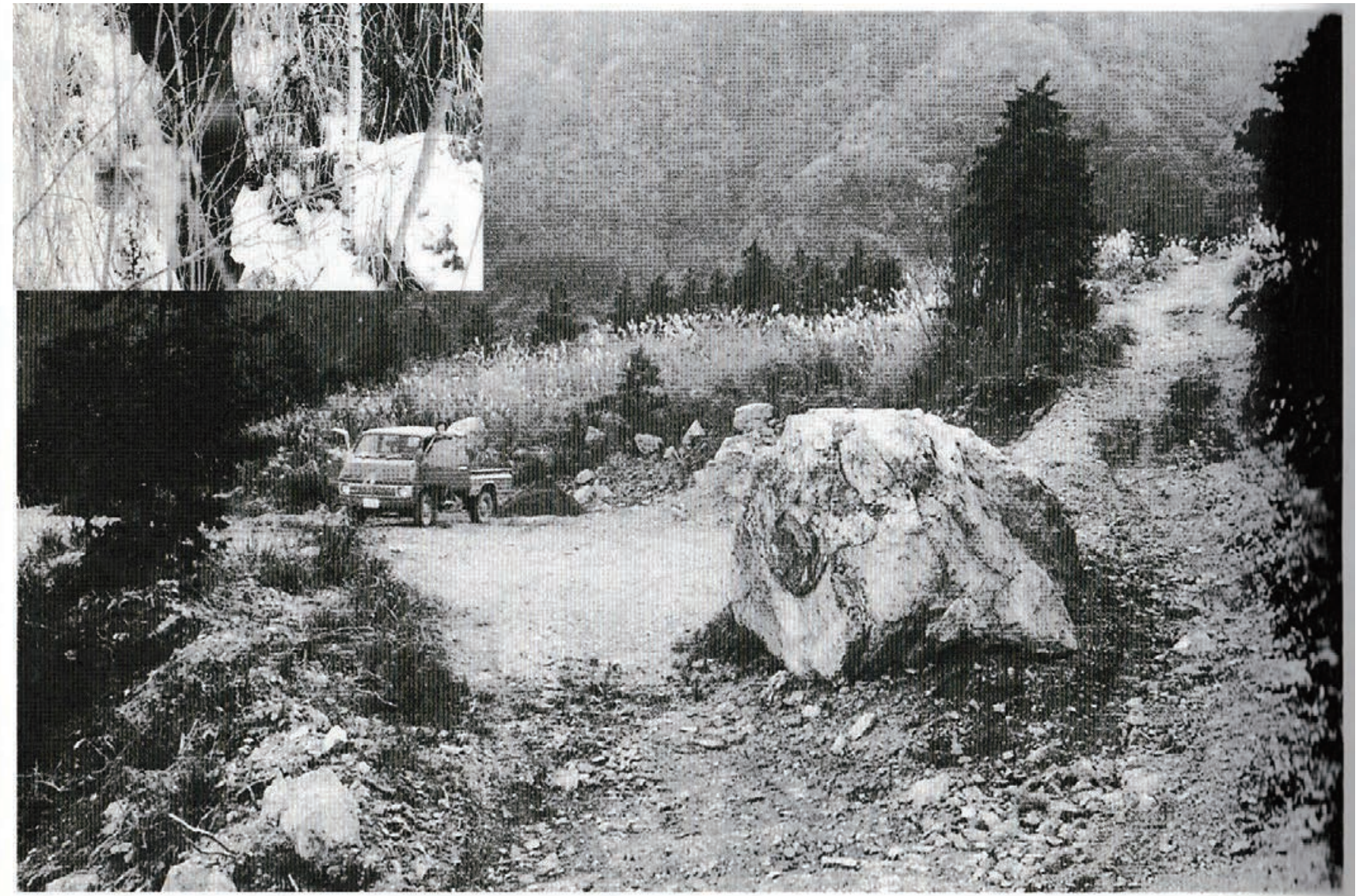
唯一まぬがれる手段は、
自然保護と観光・保養振興であると信じていた。

その強い理念のもと、昭和47年、勲 23歳で自ら行動を起こし
花の里「岳人の森」造りに取り組んだ。

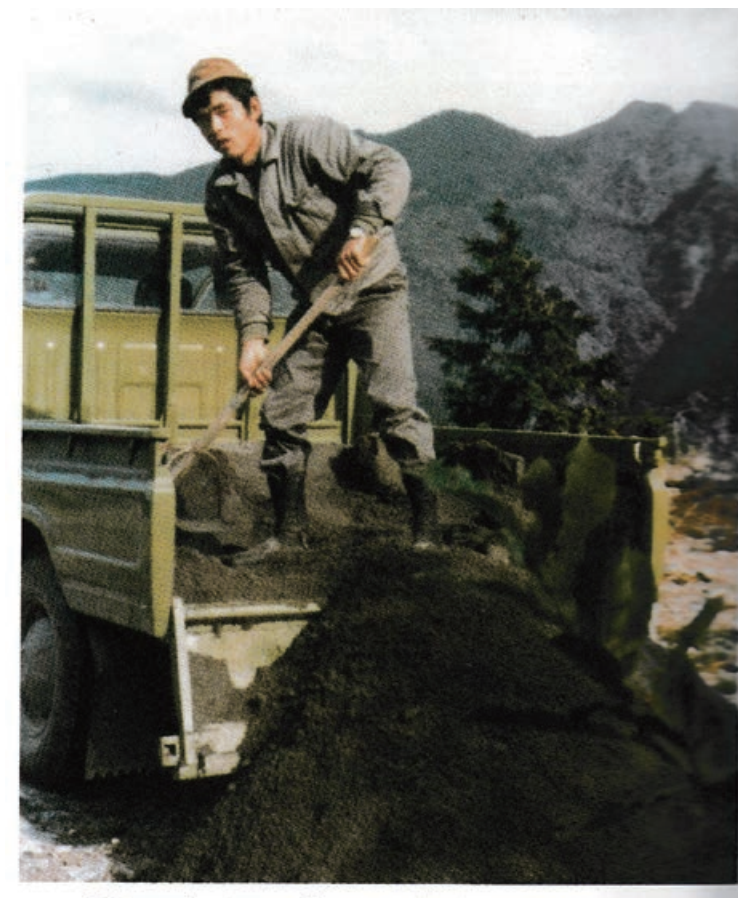
荒れた山肌をブルドーザーで開拓



開拓まもない「岳人の森」



岳人の森建設費用を得るため、植木生産を行っていた



整地に精を出す勲
(昭和48年)



なぜ「花の里」を造るのか

きっかけ

当時は木材需要の高まりで自然林を伐採し、人工林への転換が当たり前のように行われていた。

岳人の森にほど近く、神山町の南に隣接する旧木沢村(那賀町)との境にある土須峠(標高1023m) 一帯は県内でもよく知られた多雨地帯で一年間の降水量が2000~3000mmに達している。

その周辺のシンボルのように群生が見られたのがシャクナゲの木である。

シャクナゲは「雨の花」「霧の花」とも形容され、土須峠周辺では五月から六月にかけて 無数のホンシャクナゲやツクシシャクナゲの群生が開花する様子が多く見られた。

しかし開発は土須峠周辺も例外では無く、

シャクナゲの森の伐採現場を目撃したとき非常に強い衝撃を受ける。

シャクナゲの語源は「一尺すら真っ直ぐなものは無い」「尺無い」と言われるように利活用が難しく、美しい花が咲くにも関わらず作業の邪魔モノとして無残に伐採されていた。

山岳自然美を活用すると共に、

失われゆく自然を保護して行こうという決意を固めるきっかけとなる出来事であった。

なぜ「花の里」を造るのか

もどかしい時期

しかし、1980年代当時は経済活動優先の風潮が濃く、環境問題は都市部の公害に限定されるように誤解され、自然保護の思想は理解され難かった。

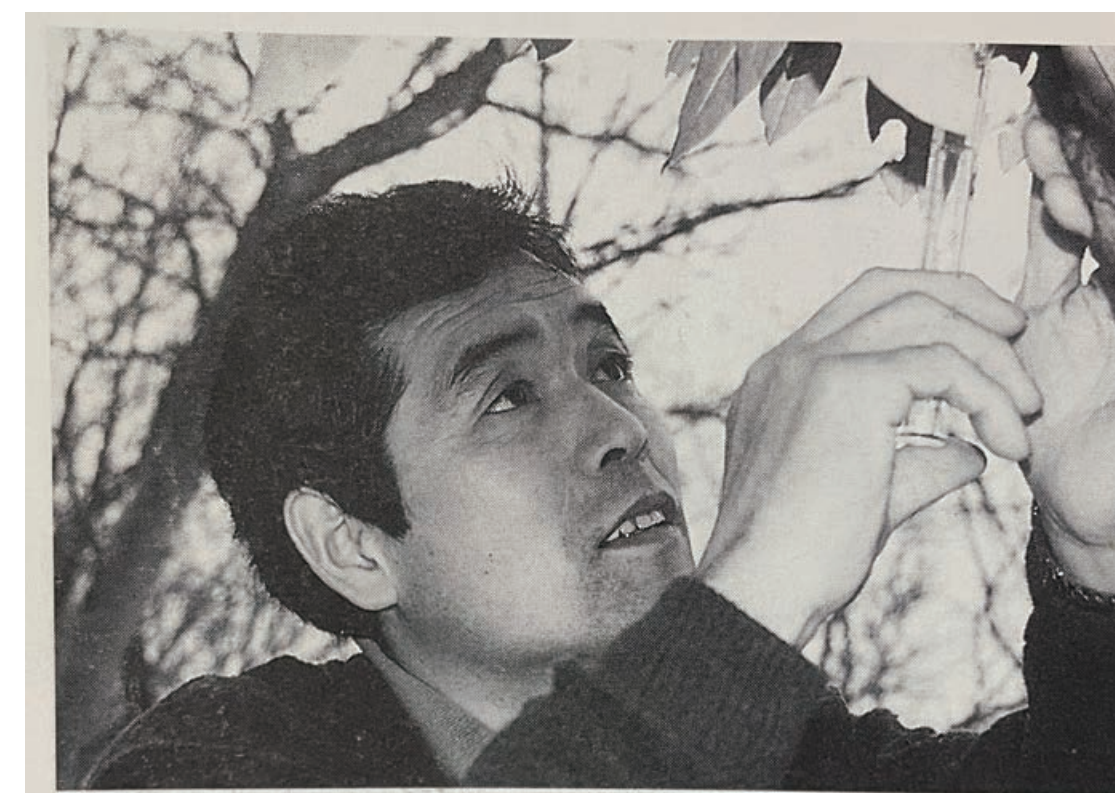
1982(昭和57)年6月5日付けの徳島新聞朝刊には、「雲早山ー高城山・シャクナゲの自生地 破壊やめて」との大きな見出しで伐採に対する批判記事が掲載された。

当時33歳だった勲は取材に対して「自然をこれ以上破壊しないで」と嘆きの声をコメントしている。

しかし経済優先の波はあまりにも高すぎた。自然保護の思想はまだまだ市民権を獲得しておらず少数意見とみなされた。勲の意見は関係機関にはすんなりと受け入れられなかった。



枯れたシャクナゲに水をやる妻・幸代



シャクナゲの木に付くカミキリ虫の防虫作業

➡ シャクナゲの保護を訴えても受け入れられず、止まらない伐採へのアンチテーゼとしてシャクナゲの植栽を岳人の森で始めた。

なぜ「花の里」を造るのか

転機となる「シャクナゲ祭り」

1987(昭和62)年 第1回シャクナゲまつりを開催

10年程育成したシャクナゲを公開するイベントを開催。反響は大きく、1日に1000人を超す来場者が訪れた。「過去に開かれた神山町内のイベントで、一度に1000人を集めた事は無かったと思う」と振り返る。

「花には人を惹きつけるチカラが有る」と確信



シャクナゲが彩る時期だけでなく、春から秋まで通年楽しめる花の里を造ることを決意。どのような植物が岳人の森にふさわしいのか、研究した。徳島山草会の仲間たちも熱心に協力してくれた。

第1回シャクナゲ祭りのチラシ



シヤクナゲ祭り

シヤクナゲ祭りの様子



地元のお店の出店もあり、大変賑わった



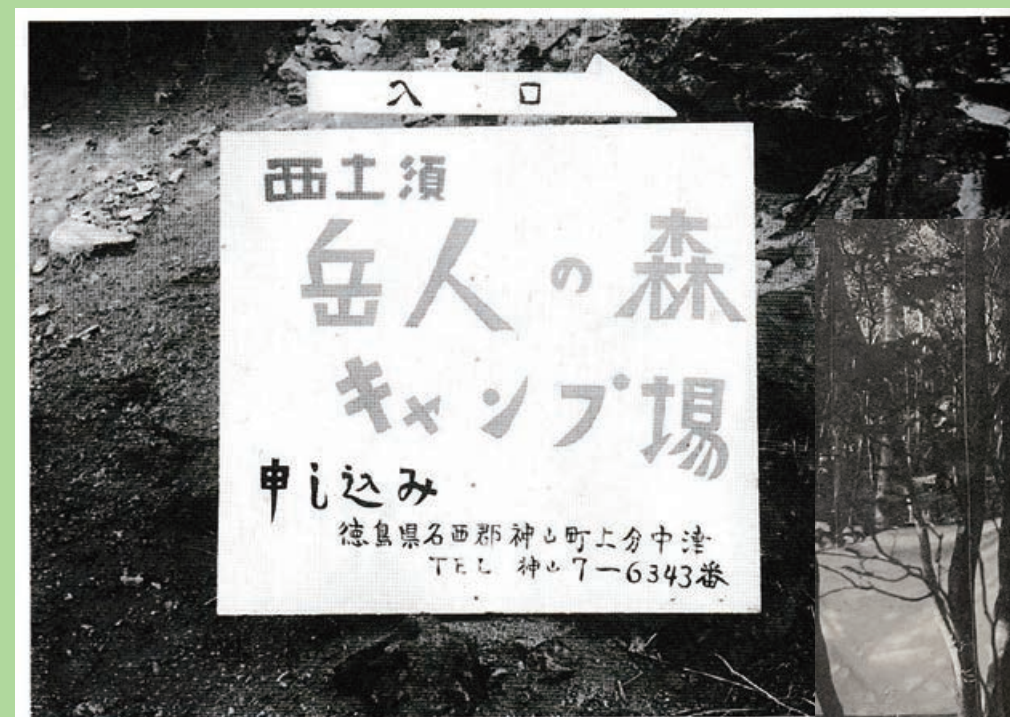
車で混雑する園内

キャンプ場

シヤクナゲの植栽と同時に荒地をキャンプ場にすべく、整備を進めていた



民間では県内第一号だったオートキャンプ場



1992(平成4)年、12月26日 電気が開通した。

神山町商工会、神山町長、町会議員、神山町役場、知人など多くの方からのご支援のもと、念願の電気が開通され、岳人の森に灯りがともった。



電気開通のお礼を述べる勲

電気が開通するまでの約20年間は、ランタンやディーゼル発電機で電気を起こしていた。

多くの絶滅危惧種が咲く園へ

「花には人を惹きつけるチカラが有る」と確信し、通年楽しむことのできる花の里を目指したが、当初は知識や経験もまだ浅く、専門家や知識人の助言を踏まえ研究、挑戦の日々であった。

失敗例



【カタクリ】

1、2年は美しい花が咲いたが、その後動物の食害に遭い3年目以降は開花せず。周辺はカタクリが自生し、同じ地質だったが自然の個体は根深く潜っていたため食害に遭わないとわかる。



【ユキモチソウ】

元々敷地内に自生しており、群生するように植栽。シャクナゲの開花期に咲いたが、夏前に野ネズミに食われ全滅。自然界では一つの種が増えすぎると、それらを減らそうとする阻害要因が現れるのではないか。

多くの種を植え、多くの失敗を繰り返すうちに徐々に、
本来自然の持つ適性 **「潜在自然植生」** という考え方に行き着く

潜在自然植生とは…

植物生態学上の概念で、人間が一切手を加えず、その土地の気候風土に応じて植物が育つ事。



徹底管理では無く、そこに人間がほんの少しの助力を加える事で、無理の無い植物の生育を促す事が可能になった。

野生種にこだわり、岳人の森園内の充実を図る一方、
失われゆく絶滅危惧種の保護に取り組み始める。



園内で確保された野ウサギの子ども

温度

湿度

日差し
強弱

土質

+

増えすぎたシカ・ウサギなど
野生動物の食害対策

育成条件プラス、野生動物の食害を対策を行い、
種子繁殖や株分を根気強く繰り返す。



←シカによって皮を剥かれた
ナツツバキ

花が咲く直前に蕾のついた先端を食べ
られたツリフネソウ



食害を受ける植物周辺には防獣ネットを
張る。作業は3代にわたって行うことも。

ネットを張る幸代と孫・充輝→



多くの絶滅危惧種が咲く園へ

ヒメシャガ（5月上旬～中旬）

山野草愛好家から提供された数株の準絶滅危惧種のヒメシャガは、現在では日本一の群生面積と言われるほどに広がった。日当たりの調整（間伐や植替えなど）を行い、今現在も面積を広げている。



四国内はもちろん、関西や関東からもツアーバスが訪れる程に注目されるようになった。

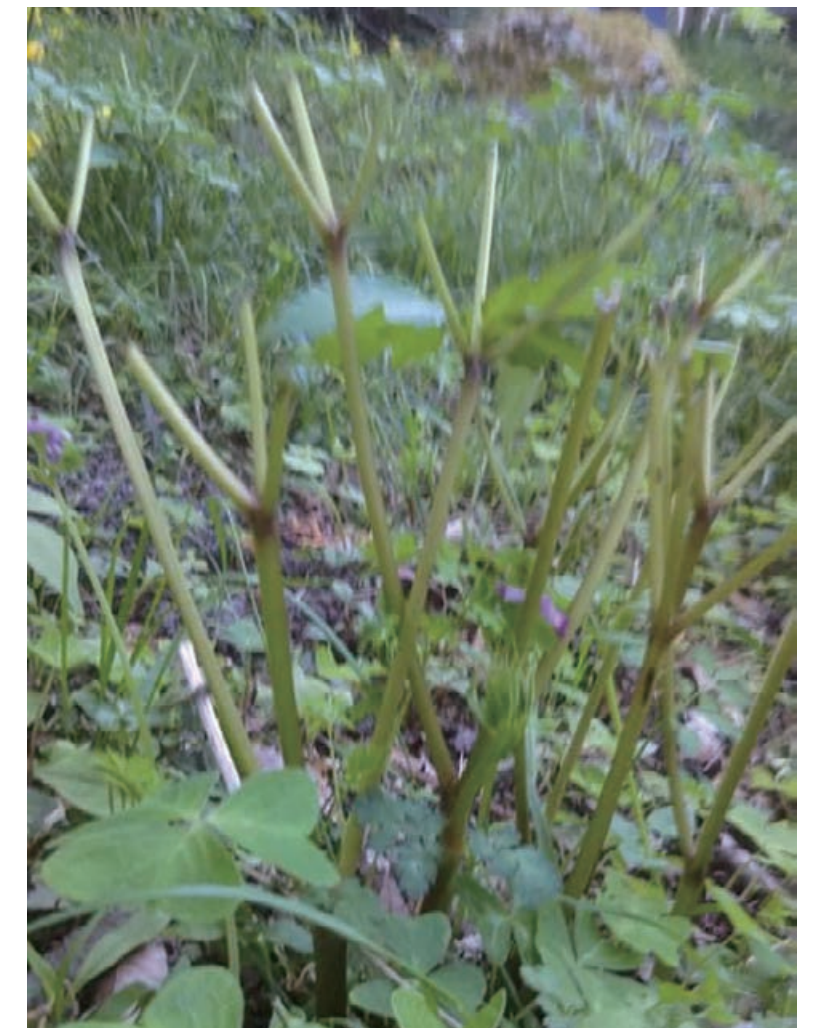
多くの絶滅危惧種が咲く園へ

レンゲショウマ (7月下旬～8月上旬)

野生絶滅の可能性が高い四国のレンゲショウマも、遺伝子交雑をすることなく、原種を保ったままその数を増やしつつある。近年、シカの食害が加速しており、レンゲショウマ植栽エリアには防獣ネットを張り、対策が必須な状況である。「森の妖精」とよばれる可憐な花であり、人気がある。

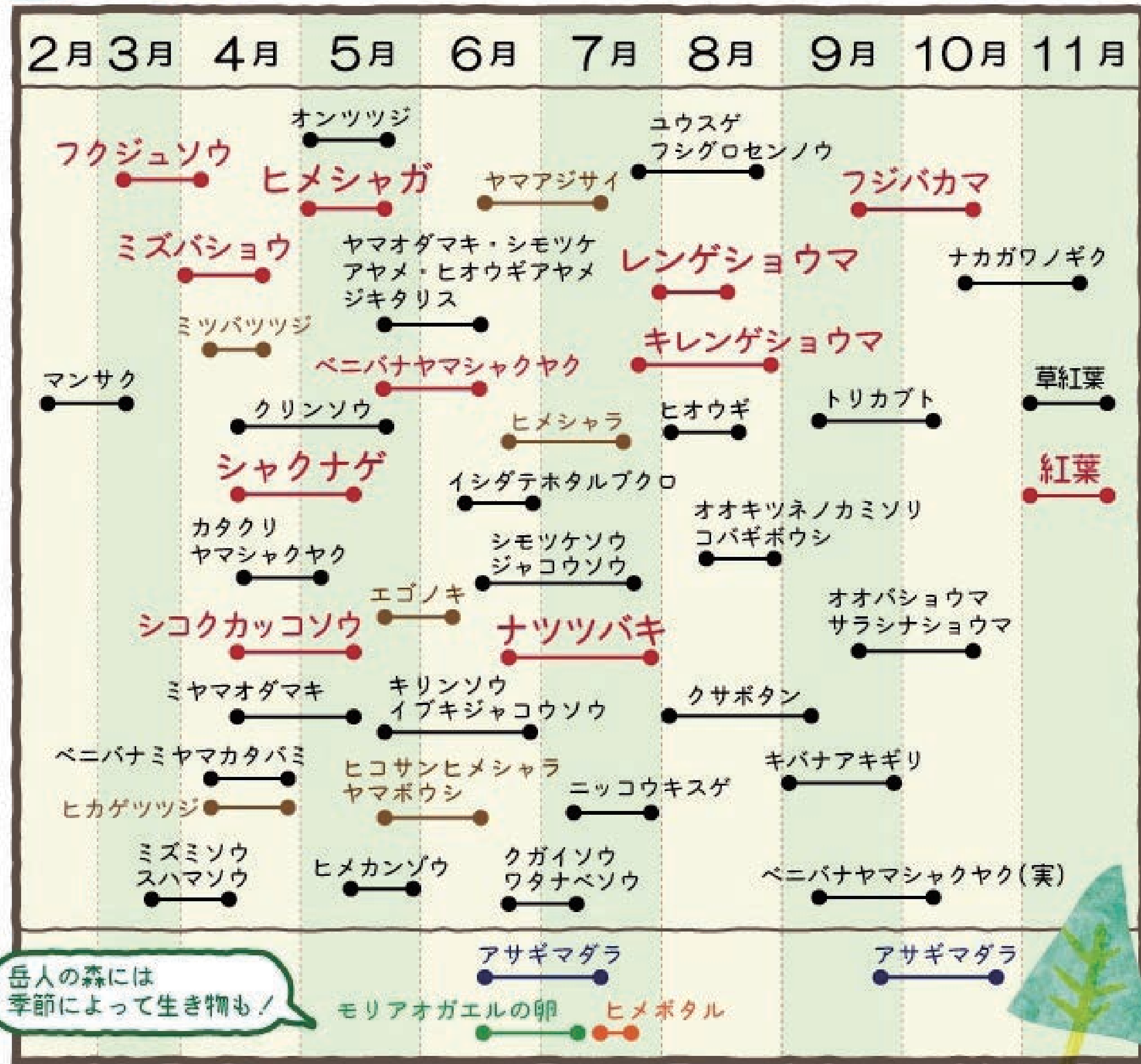


＜シカの食害＞
先端部分の蕾が全て
無くなり、開花しない株も



花カレンダー

※12月～3月：冬季閉園



岳人の森には
季節によって生き物も!

単なるキャンプ場や植物園では不十分である。絶滅危惧種の植物園を残したい。自然界から消え去るような心配のある植物を残し、多くの人の心を癒す植物園でありたい。

自然の土壤に元々生えていた植物を根付かせる潜在自然植生の考え方を大切にしながらも「人を惹きつける花の里・植物園」を今日現在まで造り続けている。

2009(平成21)年には次男 充が日本料理の修行を終えて料理人として岳人の森に加わった。食事処「観月茶屋」では、懐石料理が提供できるようになった。園内の整備は勲と共に知恵を出し、共に作業を行うことにより、急速に進んでいった。現在進行形で植物園は拡大されている。

食事処「観月茶屋」

懐石料理

- ・食事付き団体ツアー受入
- ・料理を楽しむ宿泊プラン
- ・旅行会社の宿泊ツアー受入
- ・出張料理

価値の向上



豊富な食材 山の恵み

- ・天然わらび餅
- ・山菜、きのこ
- ・幻の食材「岩茸」
- ・川魚

立地を生かす



特産品 神山すだち



NPO法人里山みらい、
神山町の飲食店と共に
「神山すだち鶏天」開発
県内外にイベント出店

地域との連携

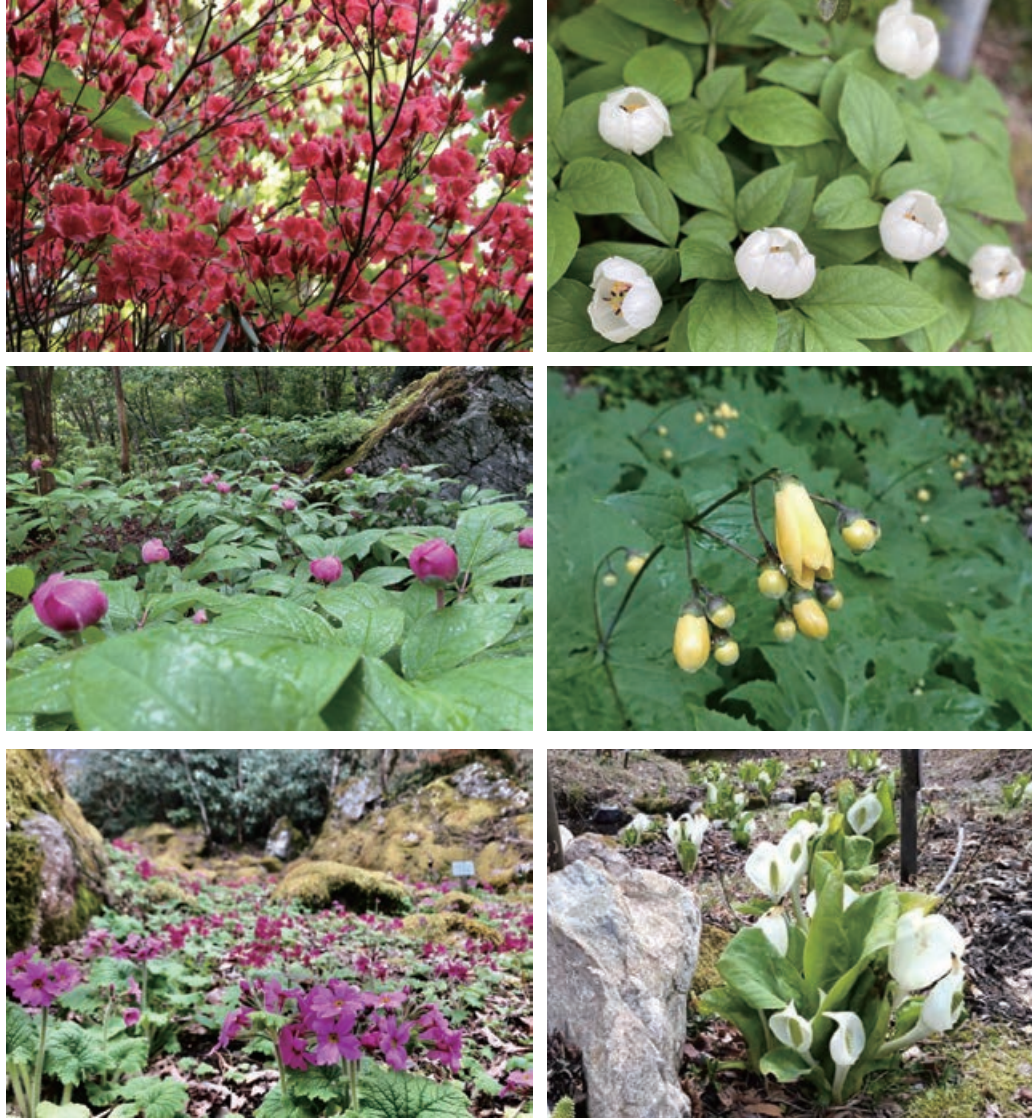


観月茶屋開店後は「植物園やキャンプを楽しむ」にプラスして「食事を楽しむ」ことが可能に

野趣あふれるキャンプ場

「岳人の森」でしか体感できない特色あるキャンプ場を目指す

四季折々のお花を観賞できる



満天の星空



自然に囲まれた環境



雪中キャンプ



ヒメボタル観賞



毎年恒例のキャンプイベント開催



デブリハット宿泊可能



自分で沸かすドラム缶風呂



直火OK



- ・近隣の山への登山も可能
- ・剣山スーパー林道への拠点にも
- ・宿泊棟もあり初心者も安心
- ・24時間管理人駐在

「地域の持つ魅力」とは

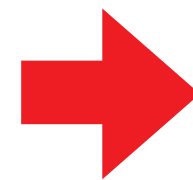
また、充が岳人の森の経営に参画した頃、地方への移住やサテライトオフィスの機運が高まり、神山町もその地として選ばれるようになった。

ITインフラだけが理由ではなく、受け入れるコミュニティ、自然も含めた地域の持つ魅力が選ばれる理由になったのでは無いかと思われる。

「自然も含めた地域の持つ魅力」

これはまさに勲が岳人の森造りに取り組む中で、実際に身をもって体感していた。

岳人の森の魅力を高める
ノウハウを長年蓄積



生まれ育った【上分中津集落】
「神通溪谷」の見直しに着手

元々、勲は岳人の森の経営だけでなく、町の観光開発にも携わり、1987（昭和62）年神山町観光協会の設立に関わり、長年副会長として、三代目会長として、「魅力あるふるさと」であり続けるため、町おこしに尽力してきた。

神通溪谷の開発

神通氷瀑保勝会 地域住民で発足

- 地元住民・移住者・世代間の交流
- 交流、活動により経験や知識の継承
- 地域間ネットワークの形成

神通溪谷の主な整備

- 神通滝遊歩道の建設
- 神通の滝「氷瀑」
- 神通発電所
- 神通溪谷の桜
- 中津の満月イチョウ



【自然学習の場に】

神通溪谷一帯の美しい四季や自然の豊かさを
感じられる自然学習の
場に。

【観光地として活性化】

神山町の奥に位置する
上分地区が観光地とし
て活性化していくことで
人の交流が生まれ、地域
経済も活性化され、町全
体が賑わう。

【持続可能な地域づくり】

最終的には放っておいて
も賑わう地域になるように
設計している。義務感で活
動するのではなく、無理の
ない範囲で自発的な活動
の継続を。

➡ 「自分たちだけよければいい」ではなく、後の人が幸せに過ごせるように

■神通滝遊歩道の建設

旧神通遊歩道は立地の不安定さもあり危険性を危惧していた。
台風の影響を受け、通行不能になることも。

**将来永く残る遊歩道の
建設を要望**

崩れた旧遊歩道



神山町観光協会会員を視察研修として、
高知県の中津溪谷の遊歩道へ案内



新たな遊歩道の建設の重要性と将来的展望を
認識してもらい、町への働きかけに尽力して頂いた

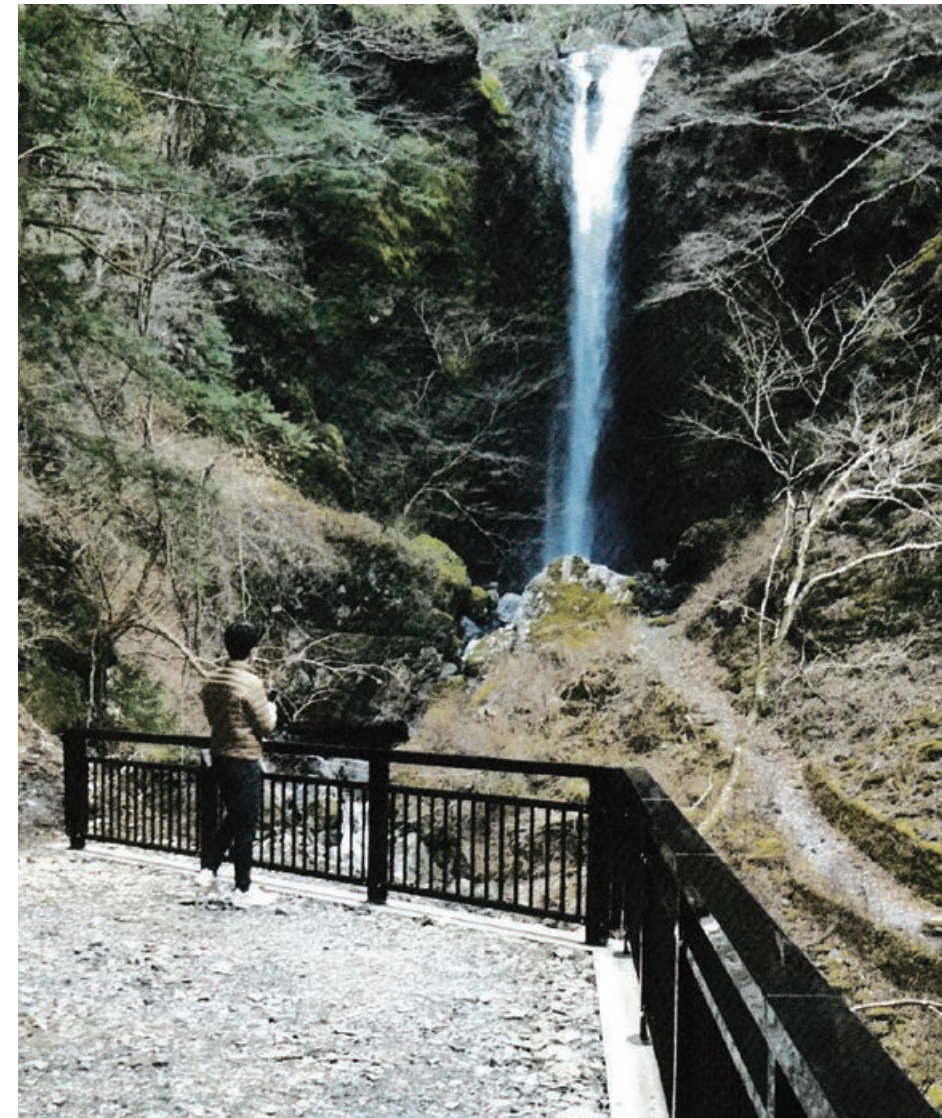
**新しい遊歩道の建設が決まり、新設の
駐車場やトイレも整備され、多くの人が
安心して観光出来る場所となった**



工事開始の様子



新設された遊歩道



滝の前で木橋を設置する
神通水瀑保勝会員



神通水瀑保勝会の
メンバーで旧遊歩道
を約20年間、
ボランティア
で直してきた



■神通の滝「氷瀑」

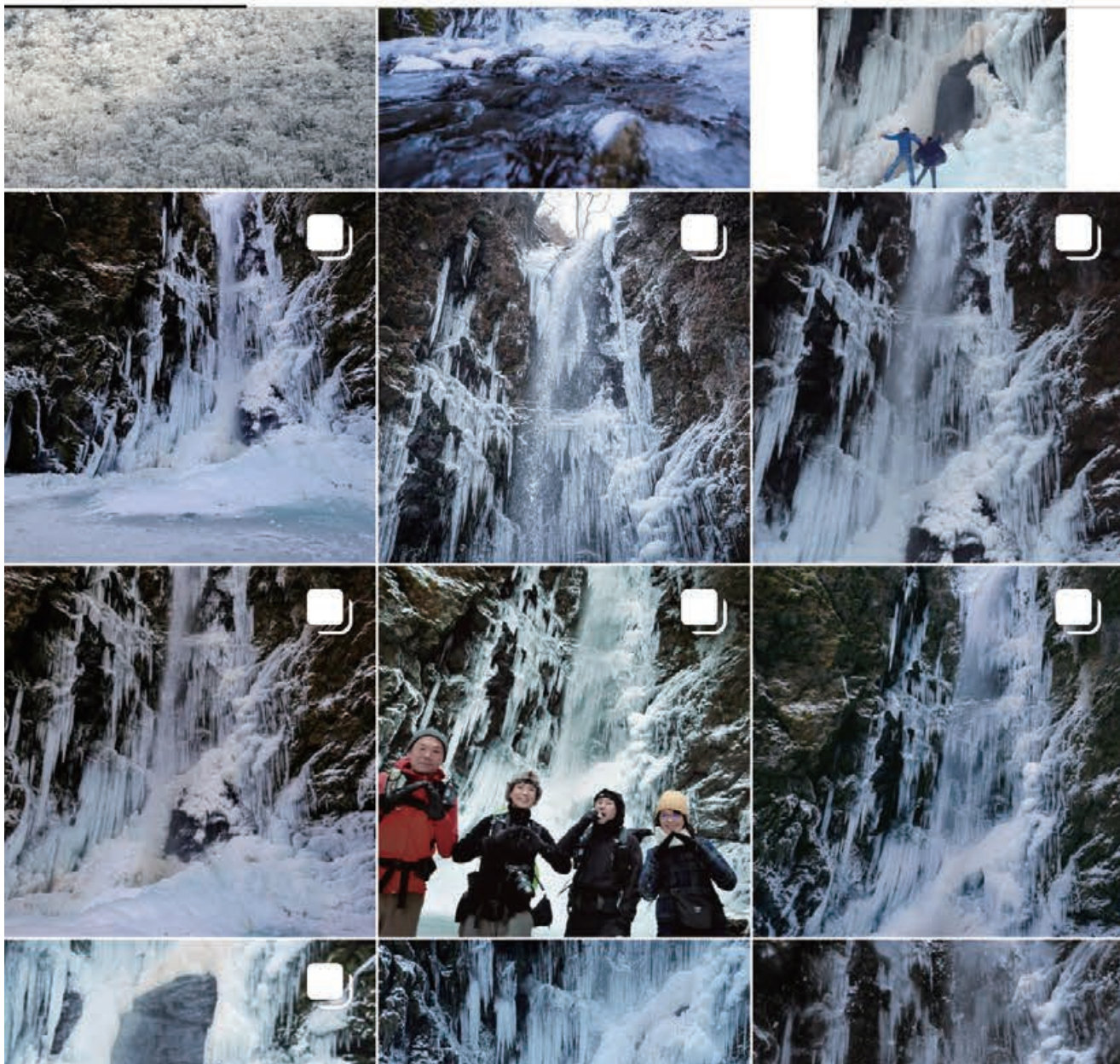
2000（平成12）年 厳冬期にカチカチに凍結した神通の滝を案内する「氷瀑祭り」を開催。2006年の第六回には500人を超える参加があった

岳人の森SNS、神山町公式SNSで神通の滝の氷瀑状態を発信しており、幅広い年齢層の方が県内外から多く訪れている。ここ数年で認知度が更に上がった。

◀ 🔍 神通の滝

📷 | Instagram

おすすめ アカウント 音声 タグ 場所 リー



氷瀑祭りの様子



■神通発電所の保存

大正7年から昭和48年まで稼動していた神通滝の川の水を活用した水力発電所、旧神通発電所。資料館として現存していたが老朽化が著しく、ほぼ解体の方針に固まりつつあった。

「歴史的価値は新たに作ることは出来ない」歴史とは唯一無二で有る。産業遺産としての価値を見直すように強く周辺に働きかけた。

草刈りなど周辺整備を担う地域住民にも負担をお願いすることとなる為、慎重な意見も聞かれたが、ゆっくりと丁寧な説明によりやがて理解が得られた。

失われるものを守り後世に伝える

エネルギーの歴史と今後を学ぶきっかけとなる場所に

修復工事前の神通発電所



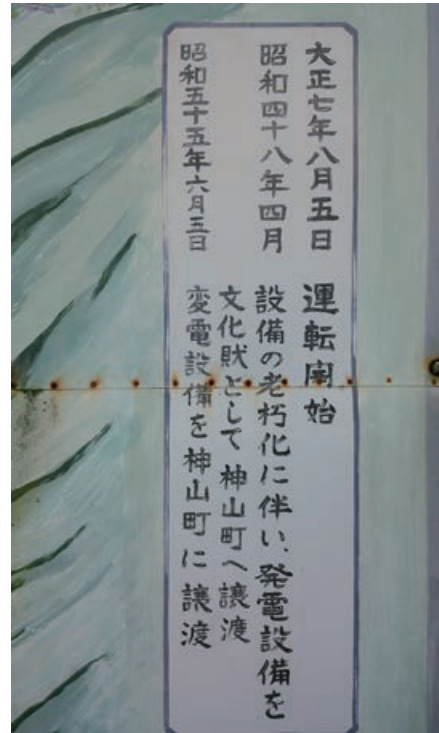
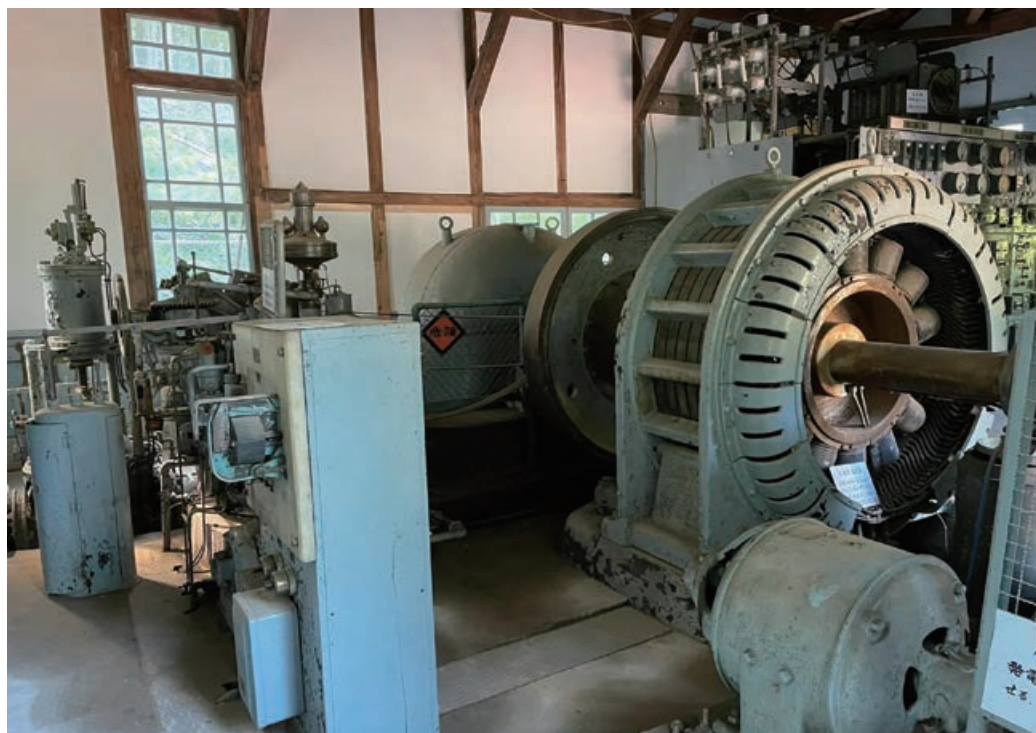
神通発電所までの道も未舗装の荒地であった



■神通発電所の保存

現在は修復保存工事が行われ往時の姿を保っている。
町役場と公民館がこの施設の管理を担い、要望があれば
ボランティアガイドとして神通発電所の案内を行っている。

内部は当時の発電機などの機器を保存し、資料館となっている



修復保存工事の様子



「こんな貴重な財産は残さないかん」
神通発電所の保存活動を行い
続ける熱。少しずつ神通発電所の
大切さが伝わっていき、風向きが
変わっていった。



神通発電所と同時期に作られた取水堰も改修工事が完了し、観光資源としての活用が期待される。



取水堰周辺の樹木伐採作業、草刈りなども神通水瀑保勝会、地域住民によって行われた

■神通溪谷の桜

画像出典
るるぶWEB
雪割桜



「神山の春は神通溪谷からはじまる」

取り組んだのが、神通発電所の周りに**雪割り桜**を植える活動だ。早咲きの桜を植え、それが2月末から3月はじめに満開になることによって、春が神通溪谷からはじまり、神山の美しいしだれ桜の満開につながっていく…というストーリーを思い描いて300本を植えた。10年後の中津集落の桜を楽しみにしている。



神通滝保勝会、地域の有志たち、森づくりやグリーンバレーのメンバー、NPO法人さくら会、地元町会議員、公民館職員、集落支援員など総勢約30名が植樹に参加くださった。



今年、来年も
植樹を行い
1000本の
雪割桜が咲く
神通溪谷に

しかし、桜の苗が鹿に食べられてしまい、ほぼ桜が全滅してしまう事件が起きた。自然と向き合っていると獣害は避けられない。**失敗を重ねながらも挑戦を辞めないことが重要だ。**

■中津の満月イチョウ

まん丸の樹形が珍しい銀杏の木であったが、特に名前は無く無名の大樹であった。そこに「満月イチョウ」と名前を付けて、この中津集落で店を営む女性に看板の作成を依頼し、2018年「中津の満月イチョウ」看板を設置。

瞬く間に人が集まる、人気スポットとなった。

「看板たてただけであんななるんやなあ」と地域の人も驚いた。



多くの人を訪れる場所の魅力がさらに高まるよう、整備が行われた

電柱の移転



支障木伐採



珍しい赤ミツマタの植栽



ライトアップ



➡ 愛郷意識はグッと高まり始めた

魅力の発掘をし、手を少し加えることにより

景観が
よくなる

人が
集まる

神通溪谷
認知度

自発的な
活動



現在では中津集落の住民や、町役場、町内の有志たちによって出店やライブなどの催しが自発的に企画され、広く知られるスポットとなった。紅葉の季節には町外からも多くの方が訪れている。

カフェには集落や町内の人が集まる憩いの場に ライブは町内外からの人で大盛況

神通溪谷
認知度

人が
集まる

集落の方、役場の方とのランチ会

近くにいる方と顔を合わせ、一緒に食事をし、お互いの話に耳を傾ける。自然と笑顔に。こうやって少しずつ地域間のネットワークが広がってゆくのを実感



満月イチョウのライトアップに合わせてカフェの出店や音楽イベントを企画（中津集落に移住している吉田夫婦）

満月イチョウ下のまあるいベンチも吉田さん作



自発的な
活動

景観が
よくなる



地域の次世代・担い手

「山村社会では自分だけの幸せはない。地域の人々が元気になってこそ自分も幸せになれる。

ただ、過疎という現象がその気持ちをむしろおぼろげにしていることがある。」(上分農協の組合長 談)

上分地区【過疎地域】

- ・後継者不足(家、商店、事業)
- ・地域行事など担い手の不足
- ・獣害の拡大
- ・行事の縮小
- ・空き家の増加 など

課題

多

岳人の森・次世代、充にとっても移住者同世代との接点は刺激が多く、さまざまな分野で協働する事により、解決にまではまだ至らずとも、地域の課題がはっきりと認識出来るように。

地域に根付いた活動・知識・経験・技術の継承
×
移住者・次世代者の新たな知識・技術・経験

無理のない範囲で、継続的な活動を

自発的に

達成感

幸福感

無理の
無い範囲

それぞれの立場、それぞれの生活を
尊重しつつ協働を

次世代の協働により生まれたイベント

「さんま祭り」

上分住民による、上分住民のための神山すだち料理を囲み、交流を図るためのお祭り。上分外の方には、上分に来る機会になるように、企画。



川又のさんま祭りから早4年！毎年恒例の予定でしたが、以下省略
上分のみならずお待たせしました！
ゆつくりと皆で集い、共に語り、食事をしましょう！

神山すだちを味わう
さんま祭り
上分川又のさんま祭り
旧上分中学校 校庭にて
※お車は校庭内に駐車して下さい
令和五年
9月22日(金)
14時頃開場(お楽しみやお話ししたりどうぞ)
焼さんま・飲食販売:16時から~19時まで
お問合せ:上分のさんま祭り実行委員会 ☎088-677-1147 (岳人の森 内)

最後に・・・

当たり前前に存在すると思っている物は、実は奇跡的な事で有るように思います。儂く、消え行きそうな小さな声に耳を傾ける事で、その価値や存在意義を深く知る事が出来ます。忘れ去られようとしている絶滅危惧種などは、人間にとってまさに見過ごしてしまいそうな物だと感じています。それらを守る行い自体は些細な事かもしれませんが、しかしそれがバタフライエフェクトとなって、やがて人々の価値観や社会構造にすら大きな変革をもたらすかもしれません。大袈裟な考えかも知れませんが、今ここで小さな種を芽生えさせる事が出来なければ、大きく育って行く可能性すら消えてしまうでしょう。

私の行ってきたものは、正解があるものではありませんでした。正解がなく、成功するかどうかわからないものを、何十年もやってきた。「たとうまくいかななくても、ずっといつか、いつか。と熱いままで終わる人生は幸せだ」と考えています。ただ漠然と何もしないで生きていくのは、もったいない。私は自分の思った方向に突き進んできたと思います。いろんな発言や行動がはじめは非常識とされていたが、だんだん常識としてとらえられるようになってきました。「50年前に過疎地対策の発想をしたこと」は私の誇りです。焦って今から始めようとしても、時間をかけてきたことにはかないません。自分の信念を貫く大切さをじみじみと実感しています。改めて私の人生を振り返ると、多くの協力者、支えてくださった方の顔が浮かびます。感謝の思いが尽きません。自分に託された時代から少しでも未来に紡いで行きたい。そんな思いで取り組んでいます。

主人 山田 勲・充